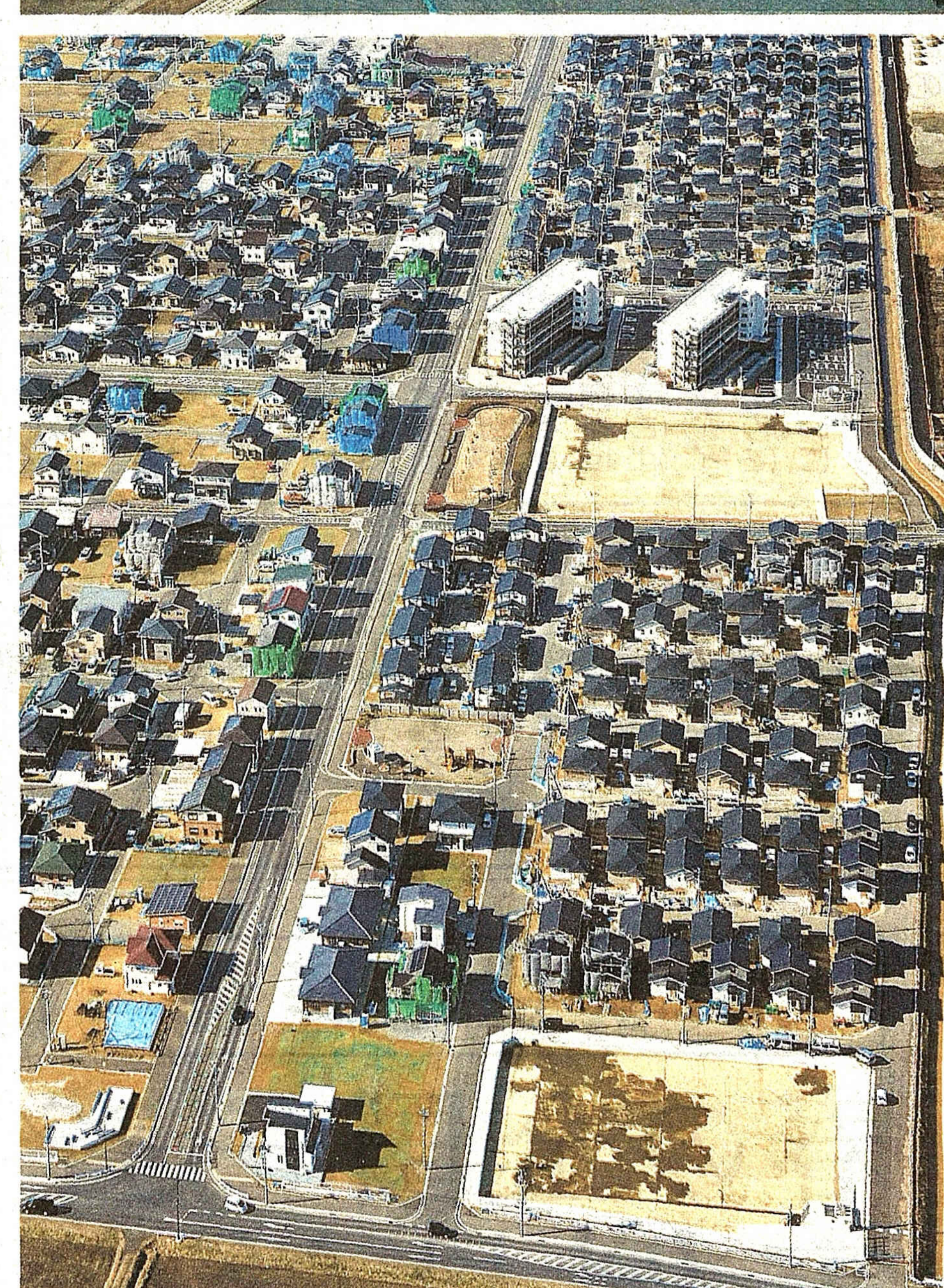
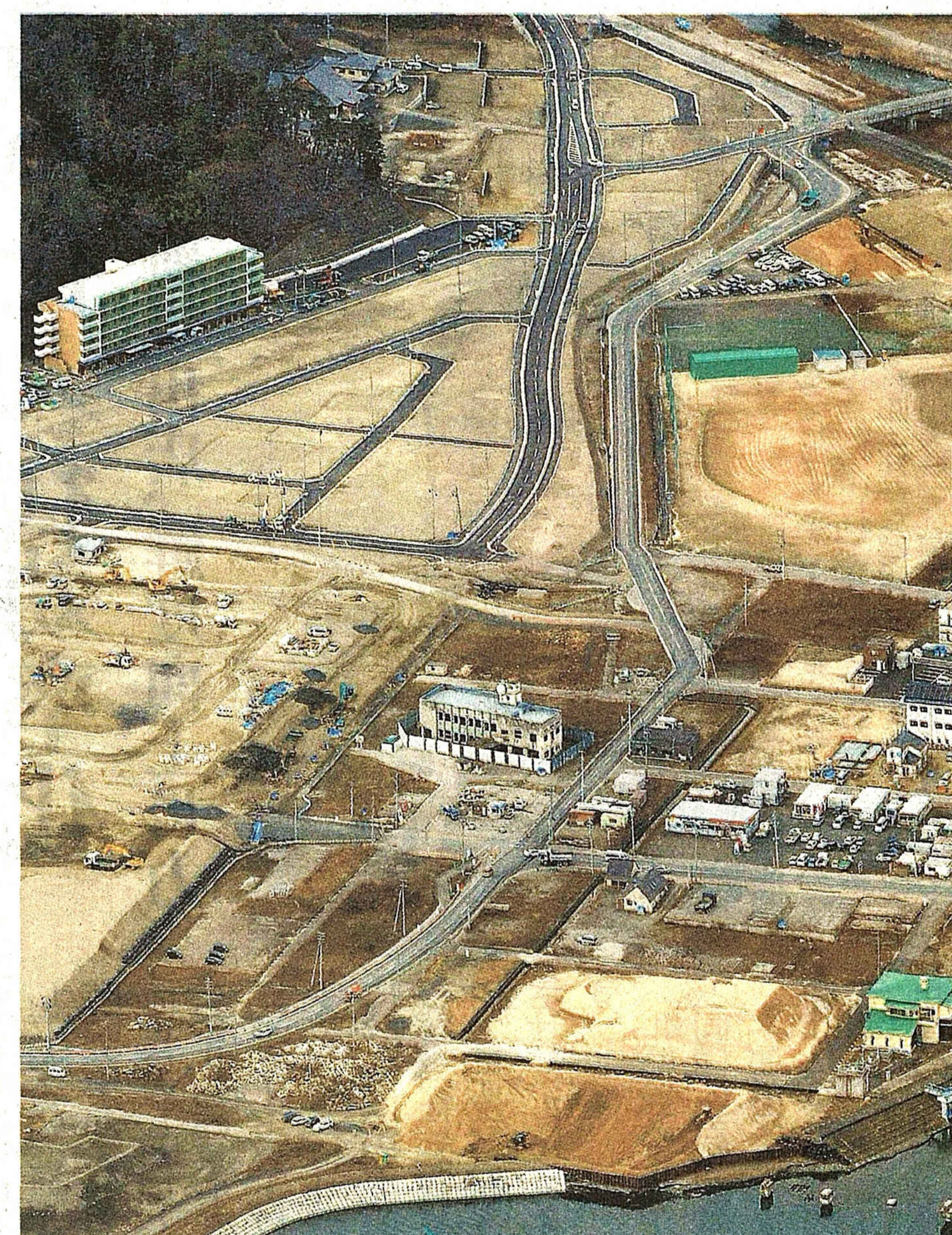


# 見えぬ復興の展望



## 集団移転地

大通りを挟んで、真新しい家や集合住宅が立ち並ぶ。公園では高齢者や親子連れが散歩を楽しむ。東日本大震災の津波で被災した最大で580世帯、1800人が移り住む計画の宮城県東松島市の「あおい地区」は、被災地の中でも大規模で先進的と言われる集団移転地だ。

広さ22畝。もとは田んぼだった。市中心部にあり、市役所やスーパー、病院、JRの駅も近い。「安心して暮らせる日本一のまち」を合言葉に、震災翌年から住民主導の協議会が住まいのルール作りを進め、年120回以上の会合を重ねた。親族や友人でグループをつくり、話し合いで同じブロックに住めるようにした。街並みを持来も保つため、一戸建ての高さや敷地面積は地区条例として定めた。公園や集会所の配置、景観の在り方、ペットを飼う際に守るマナーも自分たちで決め

## 教訓生かしまちづくり

た。2014年秋に災害公営住宅の入居が始まり、今年中に約300戸全ての公営が完成する。

これからの課題は行事も含めたコミュニティづくりだ。隣の住民が誰か分からない。ここまで交流がないとは思わなかった。公営で1人暮らしする青山照子さん(70)は寂しそうに話す。高齢者や独居も多く、行事に誘っても出てこない人もいる。「手芸や料理のサークルを作ってみたら」「高齢者の見守りも必要」。協議会で知恵を絞っている。

東松島市でまちづくりが速く進んだのは、内陸部が平地に恵まれていたという背景がある。反対に、険しい地形を抱えた自治体には、5年たっても、まちの姿が見えないところも多い。岩手県大槌町は、中心部に大きな川が流れ、それに沿って山が連なる。集団移転に適したまとまった平地は少なく、造成工事が必要になった場所が多い。土地取得の相続手続きも複雑で、用地確保に時間を要した。こうした遅れから、自宅再建

の意向があった人も次々と断念。それに合わせて計画戸数の見直しが必要になり、さらに遅れが発生した。昨秋には、土地区画整理の遅れで完成が最大1年3カ月ずれ込む災害公営住宅があると発表された。

浸水域を盛り土する中心部の区画整理では、計825戸を整備し、2月に一部宅地の引き渡しにこぎ着けたばかりだ。公営住宅も含め計約140戸になる予定の寺野白沢団地では、入居済みは3割ほど。大槌町内でもまだに仮設住宅に住む男性(69)は「5年も仮設にいたると思わなかった」と、復興の遅れにため息をつく。

新たなまちづくりに取り組む住民に共通するのは、震災の教訓を生かした大切な人の死を無駄にしたくないの思いだ。津波で長女のミキさん(当時28)を失った、東松島市あおい2丁目の自治会長相沢良章さん(59)はこの5年、自分が生き残った意味を考え続けてきた。いつか天国で娘に会えたら「いいまちをつくったよ」と言って誇りたいと思っている。



【上から】浸水域に盛り土をし、区画整理された岩手県大槌町の中心部。2月18日、新しい家が立ち並ぶ。集団移転地、宮城県東松島市の「あおい地区」同様、「あおい地区」で昨年10月に行われた交流イベント。集団移転してきた住民も参加した。

## 決まらぬ、ついのすみか

### 仮設から仮設へ

総菜や弁当の容器が入ったごみ袋が転がり、空き缶からたばこの吸い殻があふれる。岩手県釜石市の仮設住宅で暮らす小野寺一樹さん(61)は仮名がこの部屋に住めるのは、長くてもあと1年程度。来年度中の退去を迫られており別の仮設へ移る予定だが、その後の住まい再建は、今も展望が見えないままだ。

東日本大震災で千人以上が犠牲となった釜石市は、仮設住宅団地を現在の63カ所から2018年以降は20カ所にまとめる方針だ。用地となった私有地やグラウ

ンドを明け渡す必要があるため、来年度からの集約本格化に伴い、小野寺さんら多くの住人が別の仮設へと移動を余儀なくされる。

「5年の節目でもあるし、将来設計のいい時期なのかもしれない。でも、どうしてもその気になれない」。さびた自転車が外壁に立てかけられ、約半数の家から明かりが消えた仮設団地。プレハブの6畳間で、小野寺さんは乾いた笑みを浮かべ、発泡酒を飲み干した。

真っ黒の波が町をのみ込んだ光景が、頭から離れない。やり直そうと、将来を前向きに考えてみたが「津波が来ればまた同じことになる。何をやっても無駄ではないか」。虚無感に襲われ、意欲が湧かない。不安を紛らわせようと酒量が増

え、たばこを持つ左手は小刻みに震える。発生5年で仮設住宅が全て撤去された阪神大震災に比べ、東北では入居期間が繰り返し延長され続けている。

しかし釜石市の仮設に住む約1800世帯のうち、約60世帯は、将来的な住宅再建の見通しが立っていない。市は「仮設から仮設への転居は1回で済むようにしたい」とするが、ついのすみかが決まらないまま集約が進めば、仮設を転々と移動し続ける人が出かねない。

小野寺さんも市役所から転居先の仮設を紹介されているが、準備は手に付かない。「現実逃避かもしれないが、今はまだこのままがいい」。零度近くまで冷えた玄関先で、小野寺さんの吐き出す息が白く光った。



岩手県釜石市の仮設住宅で、通路を歩くお年寄り。2月19日



宮城県気仙沼市の藤原武寛さん(50)は、昨年7月、市内で最初に完成した災害公営住宅で自治会長になった。ついのすみかになると信じて入居したが、何をもって生活を再建できたと言えるのか、答えが見つからない。震災で職を失い、新たに就いた土木の仕事は、復興事業の終わりとともに減ってしまう不安もある。

一人娘で高3になる真生さん(18)と3DKで2人暮らし。震災前は事務所兼住居で水産物の通信販売や広告印刷をしていた。顧客情報など全てを津波で失い、仕事の再開は断念せざるを得なかった。

復興工事の需要を踏まえ、整地やフォークリフトなど土木に使える資格を勉強したが、未経験のため求職は難航した。

ようやく就いた土木業で収入は現在、震災前の約1・5〜2倍に。ただ、肉体労働は予想以上にきつく、病院の通院費や薬代などに消えてしまつが「今更また別の仕事には就けない」

基幹産業の漁業への補助は手厚く、漁港の復旧は進んだ

### 新生商店街



昨年11月から順次開店している「新生やまだ商店街」の店舗。国道沿いで集客を狙い、大規模な駐車場を整備した。2月8日、岩手県山田町

## 長く継続し愛される街に

人口減が進む被災地で、商売を続けるにはどうすべきか。この冬、岩手県山田町に誕生した「新生やまだ商店街」。行政の計画ではなく、商店主が自ら立ち上がり、つくり上げた。背景にあるのは町の将来への危機感だ。

三陸沿岸を縦断する国道45号沿い。復興事業で町全体が工事現場のような風景の中、昨年11月のコンビニを皮切りにヘアサロンなどが開店した。生花店やタクシー会社も順次オープンし、今年秋には全9店がそろそろ。中心となった写真店の昆尚人さん(41)は「ずっとこの場所にこだわってきた。やっとスタートラインに立てた」と話す。

中心部の山田地区では建物の約半数が全壊。一帯で新たなまちづくりが必要になった。行政は鉄道駅を中心に位置付け、共同店舗や公共施設を集約する計画を作った。町の人口は、震災前の1万9270人から約3千人減少した。このままだと「車で通り過ぎるだけ」の町になってしまうのではないか。顔見知り程度だった商店主たちが、膝をつき合わせて話すうち「国道沿いで再建したい」と一致した。

震災翌年、「新生やまだ商店街協同組合」を設立。昆さんが理事長になり、行政の計画する商店街から約500戸離れた国道沿いを再出発の地を選んだ。

### 災害公営住宅



災害公営住宅の新年会に参加した藤原武寛さん(手前右端)ら入居者。1月31日、宮城県気仙沼市

## 元の生活には戻れない

が、住宅整備は遅れが目立つ。安価なアパートは空きが少なく、収入に応じて決まる公営住宅の家賃は、来年度から控除がなくなると、現在の数倍に当たる10万円の水準まで跳ね上がる。

1月下旬、藤原さんは「せめて居心地の良さを感じてほしい」との思いから自治会で新年会を企画し、60人以上を迎えた。中学校での4カ月間の避難所生活を通じ、人との温かなつながりが、暮らしやすさを決めると気付いたからだ。

公営住宅には約160世帯が入居。この1年だけで高齢者4人が亡くなった。隣の部屋の男性は孤独死の状態で見つかった。「入居した安心感より、諦めに近い気持ちで沈んでいく人も多い」

明るい振る舞いとは裏腹、自身も「本当に不安しかない」のが本音だ。日常的に心を許して会話する人はいない。娘が進学すれば送付も必要になる。「もう元の生活には戻れない。災害公営で暮らしてみても、あらためて現実に向かふかるのです」。胸の内を明かした。

複数の事業者が共同で申請し、国や自治体が資金を出す「グループ補助金」を申請。2度退けられたのは険しかったが、その都度計画を練り直し、定期市を復活させるなど地域の活性化にも取り組んだ。3度目に認められ、総事業費約3億円のうち75%が賄えることになった。1月末にオープンした「和味処いっぷく」の山崎純さん(42)は「外からの集客にはやっぱりロードサイド。ここ以外での再建は頭になかった」と振り返る。

震災前は駅の近くで夜間のみ営業していたが、震災後に増加した復興事業者ら町外の客を狙ってランチを開始。軌道に乗り、今回、かつての店舗の倍以上の規模で再建した。補助金が出るのは被災前と同規模の復旧で、それを超える部分は実費が必要。決して楽ではないが、それでも内向きから外向きの商売にシフトし、店舗拡大で商機を狙う。

開店から約2カ月たった昆さんの「写真屋KON」もまずまずの出だした。目立たない場所にあつた仮設の時は、1日2、3人しか来客がない日もあった。今は十数人が訪れ、町外の客も目立つ。「車で分かりやすい場所に来たからかな」と手応えを感じる。

「いかに長く継続し、町民に愛される商店街にするか」。被災直後は廃業も考えた昆さんだが、今は前を見据えている。